

## ロータリーワンポイント情報 徳山 淳一 会員

ガバナー補佐幹事について少々話をさせていただきます。

2002 03 年度の小船井ガバナーの時に初めてガバナー補佐制度が出来ました。

それまでは分区代理という事でしたが、聞くところによりますと正式には分区代理という役職はなかったそうです。分区幹事もなかった、変じてG補佐幹事もなかったようです。

幹事の仕事の内容は、G補佐のセクレタリーの様に、色々な段取りをしたり、G補佐と各クラブとの連絡調整が主な仕事で御座います。

合田ガバナーのとき、金森ガバナー補佐のもと、坂入会員と一緒にG補佐幹事を務めさせていただきました。ガバナー補佐は公式訪問を入れて、最低4回は区内各クラブを回らなければならないとの事でしたので、私も何度か同行しているうち、自クラブしか知らない私にとって、各クラブを回る事は、大変興味深く、新鮮さと驚きを感じました。

基本は変わらないと思いますが、例会のスタイルも違いますし、各々クラブの特徴も御座います。阿寒湖RCを訪問した時は、鶴雅の最上階の会議室において、公式訪問をさせて頂いたなどの記憶が御座います。

ガバナー補佐は、会長と話す事が多くあります。補佐幹事はクラブ幹事と話す事が多くなり、色々と仲良くさせて頂きましたし、今でも友人としての繋がりが御座います。

ガバナー補佐の大きな役割は、「IM」(インターシティ・ミーティング)を開催することであります。金森ガバナー補佐の時のIMは、足立PDGが実行委員長となり、「釧路ルネサンス」というテーマで、元会員の荒又元釧路公立大学学長、小磯現学長とも含めまして、基調講演そして分科会に分かれてディスカッション、ねむの木学園の宮城マリ子さんをお招きして開催され、成功裡のうちに終了したという事が、補佐幹事としての大きな思い出で御座います。

その後、足立ガバナーが誕生した事は、ご縁というか、因縁めいたものを感じます。

## 経済問題 講師紹介 小野寺 英夫 担当理事

本日の講師、岩淵純一様をご紹介します。

1961年生まれ48歳、青森県出身、東京大学経済学部卒業、日本銀行に入行され、各局の調査役、企画役、参事役職を経て、平成21年5月より釧路支店長に就任、「本年を振り返り、又来年に向けて」という事で、有意義なお話を伺いたいと思います。

岩淵支店長、宜しくお願い致します。

皆様こんにちは、日銀の岩淵で御座います。

今日は釧路北ロータリークラブにお招き頂きまして大変にありがとう御座います。私もロータリアンとしてこの様な形で活動奉仕貢献出来る事を、大変うれしく思います。

本日は12月になりましたので、今年を振り返り、来年を展望するという事で、世界全体、日本経済、道東釧路地区の三つのレベルで話を進めて参りたいと思います。

スライドを用意致しましたので、ご覧頂ながらお聞き頂きたいと思います。

まず、世界経済はサブプライムショックから立ち直りの一年でありました。二つの病状があり、昨年9月リーマンブラザーズ証券が破綻、それ以降金融経済活動がパニック的に収縮する症状となり、皆が皆を信じなくなって、グローバルな形で貸し渋り、貸し剥しが発生したというイメージであります。

したがって、実体経済の生産活動や消費活動など色々、急激に止まったと言う事です。この様なショック症状は、健康な体に突然現れたのではなく、2000年に入ってから、世界の経済に様々な不均衡が蓄積した状況、典型は欧米とりわけ米国における過剰な債権債務の積み上がり、言わば信用バブルという事で、企業も、家計も、金融機関もイケイケどンドンでお金を借りて活動していた。しかしバブルが維持出来ず、はじけていった。

借金を返すバランスシート状態に陥っていった、今年1~3月多くの国でガクッと落ちている「フリーフォール」状態と呼ぶ、その後V字型に回復してきている。

基本的には、世界の中央銀行、各種政府が財政政策、金融政策をやりまして、段々落ち着いてきて、戻ってきました。従ってパニック状況、ショック状況が収まり、来年に向けて回復していくと思います。

IMFの経済最終見通しは10月に発表され、2009年は世界全体として-1.1%マイナス成長、来年にかけて各エリアともわずかながらプラスに転じて、世界全体では3.1%位、先進国は日本を含め伸び率は小さい、中国の9%に代表される様に新興国は高い見通しとなっているが、留意しておく事は、二つ目の症状の不均衡の解消は、まだ道半ばという所である。

不摂生の付けの様なものが残っている。

日本経済はどうだったか、1~3月にストンとマイナスに落ちて、7~9月にプラスエリアに戻ってきたところです。海外や前政権が執った政策のエコカー、エコポイントなどの効果だと思えます。留意点として、2つ持ち直しはしているが海外政策依存型で、個人消費や設備投資が回復している訳ではない。

今日、日本のGDP第2次速報が発表されました。11月発表第1次速報では、前期比1.2%年率4.8%、今回は前期比0.3%年率1.3%まで下方修正され、内需が思ったほど伸びていなかったと云う事です。リバウンドはしているが、リーマンショック時からみて95%、

1年前のピーク時に比べ92%ですので、景気は持ち直していると言いますが、実感が無いのは、以前の景気に比べてまだまだ低いという事であります。

年率2~3%で伸びていく事は、現状では高いハードルであり、今後経済が回復していくには、相応の時間がかかるものと思えます。

日本経済の来年の見通しは、海外の経済は改善し、対策もあり、持ち直しは続くと思えますが、穏やかなペースに留まる、雇用、賃金の回復はなかなか進まないであろう。

二番底のリスクとよく言われますが、私感として来年の春頃GDP景気は下がるのではないかと、夏以降、世界経済の伸び回復はとだえる事はないだろうという前提に立って、少しずつ成長率が伸びていくというメインシナリオとして想定しております。2010年1.2%、2011年2.1%位までの成長に行けるのではないかとという見方でありますが、様々なリスク要因もあります。

欧米での不良資産処理が遅れば、当然景気の回復は遅れます。新政権がどのような予算を組んで景気対策をしていくのかどうか、為替円高が進んできているので、企業が更に慎重になれば下振れする可能性もあり、取り巻く条件を考えていく様にしてください。

次に物価の動き、デフレの話。ここ1、2年は上げ下げの振動は激しいだろう。

1年半前2%プラスも、石油価格の高騰も効果が薄く下落、政府は緩やかなデフレにあると発表、日銀の認識も一緒であります。

物価の水準はどうかといいますと、2007年位に戻っておりデフレ進行で物価はどんどん下がっている印象ではあるが、決してそこまでいっていない。

デフレ背景経済の生産能力に比べて物が売れない需給ギャップということが原因で、GDP年35兆円の需給ギャップがあると言われている、この部分を確実に埋めていく事が政策にとって民間の経済にとっても重要な事であります。

先行き物価は2%位下落しているが、石油価格の高騰の影響が薄らいで、来年の1月は1%下落位と下落幅が徐々に縮んで行くが景気回復のペースもゆっくりである。2010年-0.8%位、2011年-0.4%と小幅だが下落が続いていくと予想されます。

中長期的な予想物価上昇率は、中国の景気が良く資源価格上昇で上振れる可能性はある、あくまでも予想であり、移ろい易いもの、皆様がデフレデフレと思ってより節約し、より支出行動を抑えれば、より物価が下がっていく悪循環に陥るリスクがある、これがいわゆるデフレスパイラルと呼ぶケースでもある。今のところ日銀は、そこまでの状況は考えていないが、リスクは重要視して、注視している。

次に道東の方ですが、まず道東と呼んでいるのは釧路、根室、十勝の3支庁分であります。道東を捉える指標はないが、釧路支店が発表している短観（短期経済観測調査）から言いますが、2007年頃からダラダラと悪化、全国同様に春先をボトムに一寸持ち直してきている状況であるが、各期マイナスポイントで長期低迷状態が続いているとは言え、浮き沈みがあって一寸戻ってきています。全体の判断として、低迷は続くものの一部に持ち直しているところもある。公共投資、個人消費の自動車、耐久消費財、機械生産などである。

見通しとして今の様な状態が続くと見ている、当面と言っているのは、短く見て年内、少し長めに見て年度内、その先は各種の政府の政策支援の持続性、二次補正でエコポイントの延長も出ましたので、民間投資がどの程度回復してくるか、全国同様、来年の春頃が境目になりそうです。

公共投資の減少のリスクで、地域での差はあるが下振りの可能性は全国に比べ大きいのではないかと、農業関連の酪農は牛乳が売れない、チーズが売れない、農家は天候不良で不作、仕分け作業で整理されているなど、マインド面で影響が出る心配があります。

もう少し明るい話をしたかったのですが、率直に申し上げました通り、回復には相応の時間がかかって行く、粘り強く対応していく事、日銀の来年のキーワードは「ねばり強く、低金利を続ける」というところです。

政策変更した時、一部の報道で日銀は豹変したと書かれましたが、「君子豹変」は中国の故事で良い方向に変わると言う事が本来の意味であり、どんどん変えていく事は良い事と、本部も考えてやっつけていこうと思っている所です。

釧路における役割と致しましては、道東からのメッセージを少しでも多く伝えていく事を使命として、皆様のご意見を頂ければ積極的に発信したいと思っております。

ご清聴ありがとうございました。